

## 公開講演会開催さる

昭和63年2月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議では、学術の成果を広く国民生活に反映浸透させるという日本学術会議法の主旨に沿うため、公開講演会を開催していますが、今回の「日本学術会議だより」では、昨年11月に開催した2つの公開講演会の講演内容を中心として、本会議の国際的活動の概要等についてお知らせします。

### 公開講演会「ハイテクと人類の将来」

昭和62年度第1回目の公開講演会は、「ハイテクと人類の将来」という主題の基に、11月21日、京都市の日本イタリア京都館ホールで開催された。

最初に、近藤次郎本会議長（経営工学）が、「誰が科学の進歩を止められるか—心臓移植からSDIまで—」と題して、まず、人口の増加によって示される人類の発展が科学の発展に支えられてきたことをあげた。一方では、日航機の墜落事故、TMIやチェルノブイリの原発事故、スペースシャトル爆発事故などにより多くの人命が失われたことを述べた。心臓移植などの生命科学の進歩が高度医療技術の倫理問題に関心を集め、SDI構想が宇宙の平和利用に新しい問題を提起しているなどを指摘した。そして、これからの科学・技術の発達には、人文・社会科学と自然科学の調和を図ることが大切であることを強調した。

次いで、関寛治本会議第2部会員（政治学、立命館大学教授）は、「ハイテク時代の学術ネットワークと平和の条件」と題して、新しい先端的な科学技術が実際に応用可能となってきたことに伴い、ハイテクを駆使したC&Cというネットワークが世界的に可能となり、複雑なネットワークから成る世界政治の構造に大きな変化をもたらしつつあることを指摘した。そして、このような状況を踏まえて、国家という壁を解決していかななくてはならないこと、そのためには、トロンの発想のコンピュータシステムを基礎として学術情報システムのより自由な地球的規模の再編成を行えるようにすること、人間間ネットワークの高次化による国の外交政策の在り方の再検討をすることも重要であることを強調した。

最後に、島袋嘉昌本会議第3部会員（経営学、東洋大学教授）は、「人間と高度科学技術との調和」と題して、「高度科学技術の粋を集めた航空機」の事故を取り上げて、その大部分は人為ミスであることを指摘し、このような事故は、人間と高度科学技術の接点で、何らかのそごが生じて起きるものであることを指摘した。そして、現在人間と高度科学技術とをいかにマネージしていくかについて、十分な科学的分析と管理的配慮がなされていない。その最大の問題点は生命尊厳を基にした経営哲学の欠落であると指摘した上で、人間と高度科学技術との調和を可能にする総合科学の重要性を強調した。

### 公開講演会「情報化と国際化」

昭和62年度第2回目の公開講演会「情報化と国際化」が、11月28日、本会議講堂で開催され、各界各層より多数が聴講し、成功裡に終了した。

講演は、3人の演者による講演とそれに関連する質疑応答が行われた。

まず最初に、猪瀬博本会議第5部会員（情報工学、学術情報センター所長）が「情報技術と国際化」と題して、情報技術の急速な発展にふれ、歴史上未曾有の規模で産業構造転換を促し、世界の人人に革命的ともいえる意思疎通の手段を提供した情報技術は、また一方で情報の氾濫を引き起こし、貿易摩擦、雇用不安、情報の地域間格差、文化の画一化など多様な国際問題を発生させてもいると指摘した。コミュニケーションは、情報提供者と情報の受け手とのバランスが何より不可欠であるとし、それらを1)情報流通の問題、2)先端技術開発の問題、3)雇用の問題、4)文化の問題に分類し、スライドを交えて意見を述べた。

次に、竹内啓第3部会員（経済統計学、東京大学教授）が「情報化時代の国際政治・経済」と題して、国際的な情報流通を取り上げ、ますます大量にかつ急速に行われるようになる、その影響として経済・文化等が国際化から世界化・地球化（グローバル化）される傾向にある今日、一方では政治における国家主義、民族主義との矛盾が激化するであろうと指摘した。これからの国際的力関係は、情報力の量が大きく関係してくると考えられると意見を述べた。情報化は世界を一つにする基盤を与えることができるが、それには各国の協調が不可欠の条件であるとし、21世紀中頃には国境・国籍を意識しない望ましい時代がくるようになるかもしれない、と結んだ。

最後に、宇野政雄第3部会員（商学、早稲田大学教授）が、「企業の情報化と国際化」と題して、企業も個人と同様に真剣に情報化と国際化について考え、生き残るために取り組んでいることを、身近なコンビニエンス・ストアやクレジット（信販）会社を例にとり、具体的にわかりやすく解説した。昨年C. I.（コーポレートアイデンティティ）戦略が企業の経営戦略としてクローズアップされているが、どういった情報（ハード）を、どのように活用（ソフト）するのか、一番の課題であると力説した。

（なお、これらの講演会の講演内容は、日学双書として、財団法人日本学術協力財団から出版されます。）

## 二 国 間 学 術 交 流

本会議は、諸外国における学術研究の動向及び現状を把握するとともに、学術研究に関する基本的、全般的事項について相手国の科学者等と意見を交換することにより、我が国の学術研究の総合的な発展に寄与することを目的として、昭和58年度から毎年2か国へ代表団を派遣している。今までに、アメリカ合衆国、マレーシア、ドイツ連邦共和国、インドネシア共和国、スウェーデン王国、タイ王国、フランス共和国、大韓民国へ派遣したが、今年度は、11月7日から15日まで連合王国へ、12月1日から5日までシンガポール共和国へ、それぞれ会長または副会長以下7名の会員を派遣した。

日本学術会議第13期は、「学術研究の国際性重視と国際的視野の確立」をその活動の重要な柱の一つとしており、今回もその観点から交流を行った。

連合王国については、「連合王国の経済停滞とその対策」「産業革命以降の連合王国における基礎科学及び応用科学の発展」「日英のアカデミックな協力はどうか」の三つのテーマについて、行政機関、研究所、大学等を訪問し、情報交換を行い、さらにその方面の科学者と意見交換会を行った。

シンガポールについては、「今後のアジア・太平洋圏の科学協力における日本の役割」をテーマに行政機関、研究所、大学等を訪問し、情報交換を行い、さらにその方面の科学者と意見交換会を行った。

今回の成果は、代表団訪問時だけのものではなく、訪問国との今後の継続的な交流、緊密な情報・資料の交換、日本学術会議と訪問国関係各諸機関との相互理解の促進・緊密化等の形で表れてくるものであり、これらの成果は、我が国の学術研究の国際交流・協力の基本姿勢及びその抜本的充実方策を検討する場合の大きな資料として役立つものと期待される。

## 日本学術会議の国際的活動

本会議は、先に述べた二国間学術交流のほか、次のような国際活動を行っている。

### 国際学術団体加入

本会議は、多くの国際学術団体に加入し、密接な協力を保ち、国際的な学術の発展に努めている。昭和62年度現在、本会議が分担金を支払って加入している国際学術団体は、国際学術連合会議(ICSU)、国際社会科学団体連盟(IFSSO)等43団体である。

### 学術関係国際会議の開催、後援

わが国の多数の科学者が世界各国を代表する関係科学者と接し、最近の研究情報を交換し、わが国の科学の向上発達を図り、行政、産業および国民生活に科学を反映浸透させることを目的として、昭和28年以降毎年おおむね4件の学術関係国際会議を学・協会と共同主催している。昭和62年度は、1)第6回ケムロン世界会議、2)第18回低温物理学国際会議、3)法哲学・社会哲学国際学会連合第13回世界会議、4)第6回国際会計教育会議の4つを共同主催し、昭和63年度は、1)国際家族法学会第6回世界会議、2)第9回世界地震工学会議、3)第8回国際内分泌学会議、4)第5回国際植物病理学会議の4つを共同主催することとしている。

以上の国際会議のほか、毎年15件前後の国際会議(国内開催)を後援している。

### 代表派遣

世界各地で開催される学術関係国際会議にわが国の学術の状況を反映させ、さらに国際学術協力を寄与するため、

本会議から代表を派遣している。

### 国際協力事業

本会議は、国際学術連合会議(ICSU)と世界気象機関(WMO)が行う「気候変動国際研究計画」(WCRP)等の国際共同・協力事業に協力するため、国内の実施計画の立案・調整を行うとともに関係研究者間の研究連絡、交流の促進を図っている。

### 学術文献収集

本会議は、国際学術団体及び各国の学術研究機関等から、継続的に約1900種の刊行物を受入れ、資料の有効利用を図っている。

## 生命科学と生命工学特別委員会中間報告

### —生命科学の研究と教育の推進方策について—

現在、生命科学に対する関心は社会全体に広がっており、生命科学の推進のためのいろいろな活動が国、民間、学界などそれぞれの立場で行われつつある。このような時に、生命科学と生命工学特別委員会としては、広い視野に立つて学問分野を横断的にとらえて、生命科学の推進方策について以下要約のごとき具体的提言を行い、各方面の意見を聴取することは非常に重要であり、時機を得たものであると考える。

### 【要約】

広い視野から生命科学の研究と教育の推進の方策を討議し、提案し、時に応じて企画、実行する組織として、生命科学教育推進会議(仮称)を設置すること。そして、この会議の事業の一つとして、まず生命科学研修コース開催のための機構をつくり、各種の研修コースを実施することが緊急に必要である。

## 登録学術研究団体等との連絡協議会

本会議は、本会議活動の周知を図り、学術研究団体等との連絡・協力関係を維持・強化するための活動の一環である登録学術研究団体等との連絡協議会の第2回目を、12月7日に、東日本の団体を対象にして本会議講堂で、12月11日に、西日本の団体を対象にして大阪ガーデンパレスで、それぞれ開催した。

今回の連絡協議会では、最初に、近藤次郎会長から、本会議の職務・権限や組織・構成などの説明の後、最近の活動として、去る10月の第103回総会で採択された勧告等の内容紹介などが行われた。

続いて、事務局から、現在進められている第14期会員推薦手続について、特に近々各登録学術研究団体に依頼される予定の「会員の候補者」の選定と「推薦人(予備者を含む)」の指名に関する届出の手続を中心に詳しい説明が行われた。この説明については、多くの出席者からその手続の詳細をただす質問が出された。

なお、出席者数は、12月7日は、339団体339名、12月11日は、58団体58名であった。

多数の学術研究団体の御協力により、「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ、ありがとうございます。

なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会

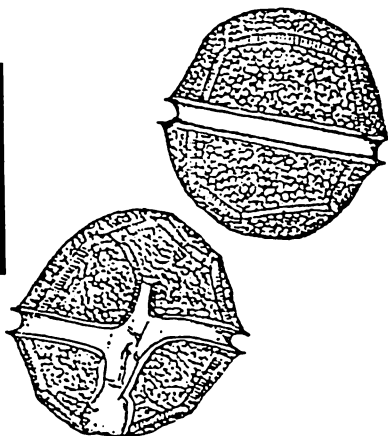
(日本学術会議事務局庶務課)

電話 03(403)6291

新刊!

# 淡水赤潮

門田 元編



取水上の衛生問題、不快臭の発生、養殖淡水魚のへい死原因などに関連し、湖沼・人工湖における“水の華”発生が社会問題化している。

本書は1979年9月、環境庁水質保全局の肝煎りで組織された淡水赤潮研究会（座長 門田 元博士）の研究成果を広く関係者に利用していただくために公刊するもので、淡水赤潮に関する生物学的知見を網羅し、その発生機構の解明と対策も論究される。また琵琶湖におけるウログレナ *Uroglena* 及び永瀬ダム湖におけるペリディニウム *Peridinium* の調査研究をケーススタディに、我が国各地で頻発する淡水赤潮問題解決の資料を直接に提供するものである。

主な内容と執筆者 ①淡水赤潮をひき起こすプランクトン(根来健一郎) ②淡水植物プランクトンの生活史(中原紘之・左子芳彦) ③淡水赤潮プランクトンをめぐる生物間相互関係(安野正之・花里孝幸・深見公雄・門田 元・石田祐三郎・内田有恒) ④湖沼の富栄養化と植物プランクトンの異常増殖(坂本 充) ⑤赤潮による被害(岡市友利・門田 元) ⑥わが国各地における淡水赤潮の発生状況(山中芳夫) ⑦琵琶湖における淡水赤潮の発生(門田 元・中西正己・吉田陽一・石田祐三郎) ⑧ダム湖における淡水赤潮の発生事例(畑 幸彦)

(A5判・286ページ・定価4200円)

## 赤潮の科学

岡市友利編 漁業に甚大な被害を与える赤潮を総合的に捉える共同研究で、赤潮の生物学と発生機構の解明。 B5判・定価6000円

## 赤潮——発生機構と対策

丸茂隆三・岩崎英雄他著 赤潮の発生機構とその被害防止対策を広く論じる。 A5判・定価1600円

## 沿岸海域の富栄養化と生物指標

吉田陽一・村上彰男他著 汚染の生物指標 定価1800円

## 藻場・海中林

八塚 剛・三浦昭雄他著 稚魚の成育場としてのアマモ場・ガラモ場の効用とその造成の方策を探る。 A5判・定価1600円

海藻を総括的に論じた待望の書!!

# 海藻資源養殖学

徳田 廣 大野 正夫 小河 久朗 著  
(東京大学農学部) (高知大学農学部) (東北大学農学部)

B5判 上製 口絵4頁  
本文354頁 付・用語集

定価5,500円 (送350円)

海藻の資源や養殖について初めて総括的に取上げた待望の書。ノリを始めとする個々の海藻養殖の現状と将来展望から、藻場造成、利用法、海外での養殖、新しい海藻の養殖法、新品種形成の現状まで、実に幅広い観点から論じ尽した海藻入門の決定版。研究者・学生・養殖業者の熱い要望に応えて遂に刊行!!

## 主要目次

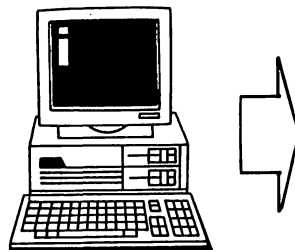
I.地球生態系と海藻 II.海藻の生育環境 III.海藻の利用 IV.世界の海藻資源と生産量 V.現在の海藻養殖 IV.藻場造成 VII.海外の海藻養殖の現状 VIII.海藻養殖の将来と展望

〒171 東京都豊島区池袋2-14 池袋西ロスカイビル (株)緑書房  
☎販売03-590-4441(直) 振替/東京4-2758・6-80496

# 最先端と素敵な出合

データベースでダイナミックプリンティングコミュニケーション

富士通 OASYS  
NEC PC-9801  
入力装置  
ドット文字



写研  
美しい  
文字

富士通 NEC  
9450シリーズ PC-9801

生まれかわるデータベース

会員管理・名簿管理・調査票発送・集計・印刷・請求・販売促進・検索

CコーポレートIアイデンティティで企業発展に貢献する

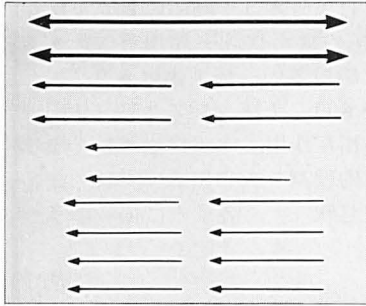
# 日本印刷出版株式会社

■本社 〒553 大阪市福島区吉野1丁目2番7号/TEL 06-441-6594(代)  
■電算室 〒553 大阪市福島区吉野1丁目3番18号

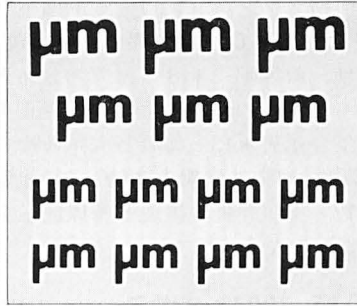
新製品ご案内!!

# レタリングシート (ブラック アンド ホワイト)

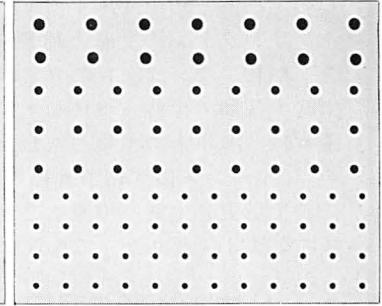
EMI NO.82014



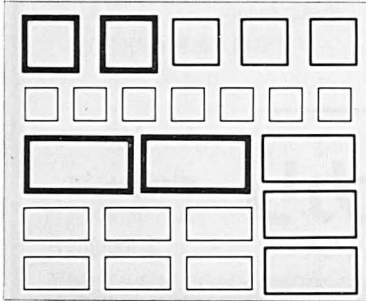
EMI NO.82016



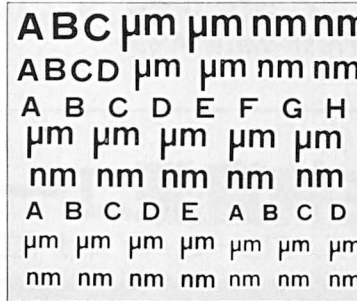
EMI NO.86626



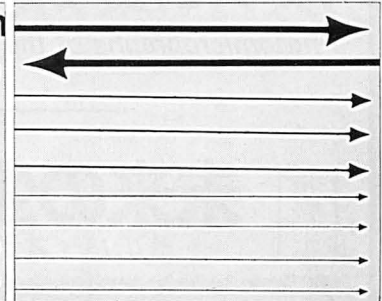
EMI NO.86627



EMI NO.86902

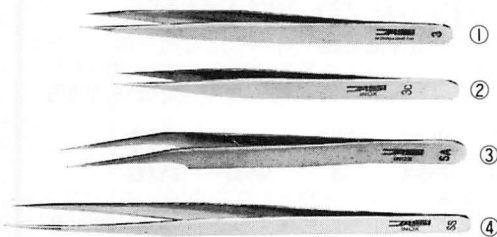


EMI NO.86916



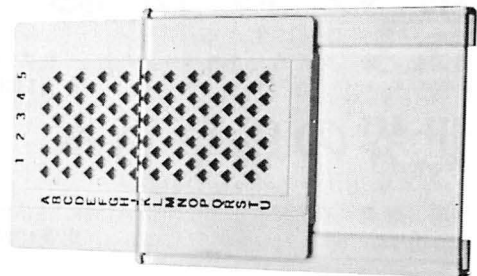
※レタリングシートの総合カタログが出来ました。下記の住所へカタログをご請求下さい。

## 西独製 精密ピンセット



- ①時計ピンセット
  - ②3Cピンセット
  - ③5型変形ピンセット
  - ④SS型ピンセット
- 各1本：¥2,200

## EMグリッドボックス



1個：¥1,800 10個：¥15,000



EM資材直販センター

〒274 千葉県船橋市三山5-6-1 TEL.0474(75)5783  
東京営業所：TEL.03(988)9906

好評発売中

自然の中の藻類の「生きている姿」を知るために

# 藻類の生態

秋山 優・有賀祐勝 共編  
坂本 充・横浜康継

A5判 640頁  
定価12800円(〒400円)

1 水界生態系における藻類の役割—有賀祐勝\* 2 水界環境と藻類の生理—藤田善彦\* 3 藻類の生活圏—秋山優\* 4 海洋植物プランクトンの生産生態—有賀祐勝\* 5 湖沼における植物プランクトンの生産と動態—坂本充\* 6 自然界における藻類の窒素代謝—和田英太郎\* 7 植物プランクトンの異常増殖—飯塚昭二\* 8 海藻の分布と環境要因—横浜康継\* 9 河川底生藻類の生態—小林弘\* 10 汽水域の藻類の生態—大野正夫\* 11 土壌藻類の生態—秋山優\* 12 海水中の藻類の生態—星合孝男\* 13 藻類と水界動物の相互作用—成田哲也\* 14 藻のバソジーン—山本鎔子\* 15 藻類の細胞外代謝生産物とその生態的役割—大和田紘一\* 16 藻類の生活史と生態—中原紘之\* 17 藻類群集の構造と多様性—宝月欣二 各章末に掲載の多数の文献は読者にとって貴重な資料となろう。

シートでみる種の同定・分類 700種が揃う

山岸高旺・秋山優編集

## 淡水藻類写真集

各B5判・各100シート・ルーズリーフ式

第1・2巻 定価各4000円

第3～7巻 定価各5000円

*Photomicrographs of the Fresh-water Algae*

以下継続 (送料各350円)

発売中

## 未来の生物資源ユーカリ

—そのバイオテクノロジーとバイオサイエンス—

西村弘行編

A5判・304頁

定価5800円

発売中

## レプトスピラ症防疫指針

吉井善作監訳

B5判・224頁

定価3500円

## 南の動物誌

—熱帯森林に生きる—

渡辺弘之著 熱帯森林を専攻する著者が、熱帯地域の動植物の生活を写真を中心に語る。定価1300円

## 世界の珍草奇木

—植物に見る生命の神秘—

川崎 勉著 自然界の重要な仲間植物群、強い生命力と環境への適応力を感激の筆で語る。定価1300円

近刊

## 河川の珪藻

B5判

小林 弘著

内田老鶴圃

東京・文京区大塚 3-34-3 / Tel 03-945-6781

FAX 03-945-6782

## 日本淡水藻図鑑

廣瀬弘幸・山岸高旺編 日本ではじめて創られた本格的な図鑑。淡水藻類の研究者や水に関係する方々にとっては貴重な文献である。定価36,000円

## 藻類学総説

廣瀬弘幸著 藻類の分類と形態を重点に置いて、克明な図により丁寧に解説する。定価10000円

## 植物組織学

猪野俊平著 植物組織学の定義・内容・発達史から研究方法を幅広く詳述した唯一の書。定価15000円

## 学 会 出 版 物

下記の出版物をご希望の方に頒布致しますので、学会事務局までお申し込み下さい。(価格は送料を含む)

1. 「藻類」バックナンバー 価格、会員各号1,750円、非会員各号3,000円、30巻4号(創立30周年記念増大号、1-30巻索引付)のみ会員5,000円、非会員7,000円、欠号: 1-2号、4巻1. 3号、5巻1-2号、6-9巻全号。
2. 「藻類」索引 1-10巻、価格、会員1,500円、非会員2,000円、11-20巻、会員2,000円、非会員3,000円、創立30周年記念「藻類」索引、1-30巻、会員3,000円、非会員4,000円。
3. 山田幸男先生追悼号 藻類25巻増補. 1977. A5版, xxviii+418頁. 山田先生の遺影・経歴・業績一覧・追悼文及び内外の藻類学者より寄稿された論文50編(英文26, 和文24)を掲載. 価格7,000円。
4. 日米科学セミナー記録 Contributions to the systematics of the benthic marine algae of the North Pacific. I. A. Abbott・黒木宗尚共編. 1972. B5版, xiv+280頁, 6図版. 昭和46年8月に札幌で開催された北太平洋産海藻に関する日米科学セミナーの記録で、20編の研究報告(英文)を掲載. 価格4,000円。
5. 北海道周辺のコンブ類と最近の増養殖学的研究 1977. B5版, 65頁. 昭和49年9月に札幌で行なわれた日本藻類学会主催「コンブに関する講演会」の記録. 4論文と討論の要旨. 価格1,000円。

### Publications of the Society

Inquiries concerning copies of the following publications should be sent to the Japanese Society of Phycology, c/o **Division of Tropical Agriculture, Faculty of Agriculture, Kyoto University, Kitashirakawa-oiwakecho, Sakyo-ku, Kyoto, 606 Japan.**

1. **Back numbers of the Japanese Journal of Phycology** (Vols. 1-28, Bulletin of Japanese Society of Phycology). Price, 2,000 Yen per issue for member, or 3,500 Yen per issue for non member, price of Vol. 30, No. 4 (30th Anniversary Issue), with cumulative index (Vols. 1-30), 6,000 Yen for member, or 7,500 Yen for non member. Lack: Vol. 1, Nos. 1-2; Vol. 4, Nos. 1, 3; Vol. 5, Nos. 1-2; Vol. 6-Vol. 9, Nos. 1-3 (incl. postage, surface mail).
2. **Index of the Bulletin of Japanese Society of Phycology.** Vol. 1 (1953)-Vol. 10 (1962) Price 2,000 Yen for member, 2,500 Yen for non member, Vol. 11 (1963)-Vol. 20 (1972). Price 3,000 Yen for member, 4,000 Yen for non member. Vol. 1 (1953)-Vol. 30 (1982). Price 4,000 Yen for member, 5,000 Yen for non member (incl. postage, surface mail).
3. **A Memorial Issue Honouring the late Professor Yukio Yamada** (Supplement to Volume 25, the Bulletin of Japanese Society of Phycology). 1977. xxviii+418 pages. This issue includes 50 articles (26 in English, 24 in Japanese with English summary) on phycology, with photographs and list of publications of the late Professor Yukio YAMADA. ¥ 8,500 (incl. postage, surface mail).
4. **Contributions to the Systematics of the Benthic Marine Algae of the North Pacific.** Edited by I.A. ABBOTT and M. KUROGI, 1972. xiv+280 pages, 6 plates. Twenty papers followed by discussions are included, which were presented in the U.S.-Japan Seminar on the North Pacific benthic marine algae, held in Sapporo, Japan, August 13-16, 1971. ¥ 5,000 (incl. postage, surface mail).
5. **Recent Studies on the Cultivation of *Laminaria* in Hokkaido** (in Japanese). 1977. 65 pages. Four papers followed by discussions are included, which were presented in a symposium on *Laminaria*, sponsored by the Society, held in Sapporo, September 1974. ¥ 1,200 (incl. postage, surface mail).

昭和63年3月5日 印刷

昭和63年3月10日 発行

©1988 Japanese Society of Phycology

禁 転 載  
不 許 複 製

編集兼発行者

坪 由 宏

〒 657 神戸市灘区鶴甲 1-2-1  
神戸大学教養部生物学教室内  
Tel. 078-881-1212

印刷所

日本印刷出版株式会社

〒 553 大阪市福島区吉野 1-2-7

発行所

日本藻類学会

〒 605 京都市左京区北白川追分町  
京都大学農学部熱帯農学専攻内  
Tel. 075-751-2111  
(内線 6355, 6357)

Printed by Nippon Insatsu Shuppan Co., Ltd.

本誌の出版費の一部は文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」による。

Publication of The Japanese Journal of Phycology has been supported in part by a Grant-in-Aid for Publication of Scientific Research Result from the Ministry of Education, Science and Culture, Japan.

# 藻類

## 目次

<b>Gerald T. Kraft</b> : グレートバリアリーフ産 <i>Seirospora orientalis</i> (新種) について…………… (英文)	1
<b>大森和子・大森正之</b> : 藍藻 <i>Spirulina platensis</i> におけるアンモニア同化…………… (英文)	12
<b>原 成光・高橋永治</b> : 大阪湾塩屋海岸における原生生物群集の季節的変動…………… (英文)	17
<b>坂西芳彦・横浜康継・有賀祐勝</b> : カジメおよびアラメの葉片を用いた光合成の測定…………… (英文)	24
<b>横浜康継・前川行幸</b> : プロダクトメーター (差動式検容計) による大型試料の光合成及び呼吸の測定……………	29
<b>山本民次・高尾允英</b> : スサビノリ <i>Porphyra yezoensis</i> 葉体のアンモニア態および硝酸態窒素の取り込みに及ぼす温度の影響……………	37
<b>三上日出夫</b> : ヤレウスバノリ (紅藻, コノハノリ科) について……………	43
<b>藤田大介</b> : <i>Fostiella zostericola</i> モカサ (紅藻, サンゴモ科) の培養……………	48
◆◆◆	
ノート	
<b>小亀一弘・吉田忠生</b> : 日本新産緑藻 <i>Blobocoleon piliferum</i> PRINGSHEIM (Chaetophoraceae, Chlorophyta) についての観察……………	52
<b>川嶋昭二</b> : 外国産コンブ目植物の漂着記録(4) チシマサツマタコンブについて……………	55
<b>Cristine A. Oroasco・大野正夫</b> : フィリッピン・セブ島における海藻の利用……………	57
<b>榎本幸人</b> : 神戸大学理学部附属臨海実験所……………	59
<b>西沢一俊</b> : 海藻の生産と利用の国際講習会……………	64
◆◆◆	
総説	
<b>高村典子</b> : 藍藻による水の華, 特に <i>Microcystis</i> 属の生態学的研究の現状……………	65
◆◆◆	
討 報……………	61
新刊紹介……………	80-81
ニュース……………	82-83
学会録事……………	84
日本藻類学会第12回大会講演要旨……………	87